

# Keelingの*Tourists' Guide* (1880) についての研究

## — 山本覚馬著英文『京都とその近郊の名所案内』（1873）と 京都博覧会、古い西洋人旅行記の影響 —

ちよま いづみ  
千代間 泉 同志社女子大学大学院文学研究科博士課程（後期）

This research investigates how W.E.L. Keeling's *Tourists' Guide* (1880) describes Kyoto's famous places and newly popular activities through British eyes. K. Yamamoto's *Celebrated Places in Kiyoto* (1873), which was issued for the Kyoto Exposition, is used for comparison to ascertain its influence on *Tourists' Guide*. Keeling selected from Yamamoto's list of tourist spots, as well as from Kyoto Exposition venues including Imperial palaces and high-ranking temples. His guidebook was also found to have been greatly influenced by older travel writings by Westerners including the Swede Carl Thunberg, the German Engelbert Kaempfer, and the sixteenth-century Portuguese missionary Luís Fróis. Keeling introduces popular activities including dinner with geisha and shooting the rapids; he vividly describes and recommends the latter. Influenced by earlier travel writings by Westerners as well as by the Kyoto Exposition and Yamamoto's guide, Keeling's *Tourists' Guide* is an important historical document and an exciting piece of travel writing that depicts Kyoto's inbound tourism in the early Meiji period.

キーワード：キーリング、山本覚馬、英文日本ガイドブック、京都博覧会、古い西洋人旅行記

Keyword : W.E.L. Keeling, Yamamoto Kakuma, guidebook to Japan, Kyoto Exposition, Older travel writings by Westerners

### 1. はじめに

*Tourists' Guide*<sup>1</sup>（以下TG）は、1880（明治13）年2月に初版刊行の、イギリス人による日本観光ガイドブックの先駆けで、「訪日西洋人観光客に限られた旅行日数で効率的に観光できる」（Keeling, 1880 : preface）ことに焦点をあてて制作された。旅行先に持ち運びやすい寸法（17.3×11.3cm）のガイドブックである。TGは好評を得て改版増補を繰り返し、表題、編纂者、出版社を変え、1890年刊行の第4版2刷の *Keeling's Guide to Japan*<sup>2</sup>（以下KG）まで確認できる。

編纂者のKeeling（以下キーリング）については、伊藤久子（2009）の論説に詳しい<sup>3</sup>。伊藤の示した『資料御雇外国人』によると、キーリングの名前は Wallace Edward Lloyd Keeling、イギリス人のお雇い英学教師であった。明治6年、当時25才から雇いの記録が始まる。複数の学校、雇い主を転々とし、福沢諭吉に「（12年3月1日～7月31日、雇継12年9月11日～12月25日）」（ユネスコ東アジア文化

研究センター、1975）の期間雇われるが、その後の記録はない。

1873年初版刊行の山本覚馬著丹羽圭介制作 *Celebrated Places in Kiyoto*<sup>4</sup>（以下覚馬名所案内）については、小嶋正亮（2019）が改版の歴史に詳しい。小嶋（2019）によると、覚馬名所案内は好評のうちに複数回改版増刷され、発行年は1873年のまま、1877（明治10）年の鉄道開通頃には、銅版画の変更とともに改版された。後期刊行のタイトルは、*The Guide to the Celebrated Places in Kiyoto & the Surrounding Places for the Foreign Visitors*（1873）<sup>5</sup>である。また拙論（2020）には、覚馬名所案内の制作背景と改訂についての考察がある。

長坂契那（2010）は、TGの編纂者Keeling（以下キーリング）が、TGの序文に「既に、『横浜案内』や『東京案内』、『京都案内』などの優れたガイドが出版されている [Keeling, 1880 : PREFACE] という一文がある」ことを指摘して、その『京都案内』とは、覚馬名所案内であ

り、「一定の購買数を確保でき知名度が高かったことが伺える」（長坂契那、2010）とした。

この長坂の論考に賛同し、覚馬名所案内がTGの参考文献となった可能性があると考え、覚馬名所案内を比較対象として分析を行った。またその分析の中には、後述する先行研究に基づき、江戸時代、並びにそれ以前の西洋人旅行記（以下、古い西洋人旅行記）がもたらす、TGの京都記述部分への影響を含めて調査した。

本稿において、十分に京都記述部分の研究を行い、TGが何に影響を受けて、名所の取捨選択を行い、西洋人の眼から見た「観光したい京都」を提案したのかを考察した。その結果、TGの内容には、古い西洋人旅行記からの影響による「西洋人が追体験したい京都」と、覚馬名所案内からの「日本側が見せたい京都」からの取捨選択があり、それに加えて、産都市京都についての記述と、西洋人が好む観光箇所や観光行動を独自に取材、ま

た付加価値をつけて紹介したことがわかった。

また日本側からの影響について、覚馬名所案内の直接的な影響以上に、覚馬名所案内の母体である京都博覧会自体が、大きく影響したことがわかった。当時の京都国際観光の「西洋人に見せたい名所」が具体的に提示され、TGに取り入れられた。TGの京都記述部分は、西洋人の嗜好と眼差しから、明治初期の京都国際観光の進展が見て取れる重要な史料である。

## 2. 先行研究

TGについて、踏み込んで論じた先行研究はあまり見当たらない。それは先述したキーリングの人物像が長く不明であったことと、TGと同時代に刊行され、西洋人観光客の大きな信頼を得た、*A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan* (1881) (以下HT) が明治期のガイドブック研究に強く影響したからである<sup>6</sup>。

TGについての評価は、例えば野口祐子(2014)は、「横浜を中心とした観光が詳しく、関西地方では京都・琵琶湖・大阪だけが挙っている。当時の日本国内の事情を反映した旅行案内である。最初の詳しい日本ガイドブックは、サトウとホーズの編纂<sup>7</sup>」のガイドブックである、とTGを評価しつつもHTの重要性を述べている。一方西洋人の日記、旅行記、ガイドブックに詳しい伊藤久子(2009)は、「マレーのハンドブック<sup>8</sup>は内容も高度で、立派な本であったが、キーリングのガイドブックで事足りる旅行者も多かったと思われる」と述べ、西洋人観光客の用途に応じて、TGとHTは双方とも同時期に好評を得た、と論じた。

幕末から明治時代の、ガイドブック・旅行記に記述された京都観光についても、HTを中心に詳細な研究が行われているが、TGについては十分とは言えない。田中まり(2004)は実用的な情報を載せた、詳細な旅行案内書であるHTによって、「ようやく「観光」の対象となり

えた」と述べ、HTの京都記述部分を詳しく論じた。野口祐子(2014)は、日本に長期滞在したイギリス人達が記述し、明治時代に出版された英語ガイドブックや旅行記を分析し、「ガイドブックに扱われた京都の名所は、欧米人のまなごしを受けて、その価値を変貌させていった」と述べた。長谷川雅世(2015)は、明治時代のイギリス人の旅行記に取り上げられた、特別な京都の寺社について論じた。

滝波章弘(2012)は、「ある旅行記は、それ以前の旅行記の影響を受ける(中略)何かを読み、その追体験のように自らの旅行を語る場合もある、ある人が旅行記を読み、その内容が別の人に伝わり、いつの間にか社会に共有される旅行感が成立している場合もある」と述べた。明治初期のガイドブックが参考にした、明治時代以前の外国語での旅行記や文献について、重点的に研究された例は少ないが、田中まり(2001)は「鎖国政策下にあった江戸期に京都を訪れた外国人の例は非常に少なく、主に長崎において貿易を許されていたオランダの代表が公的に将軍を訪問する際に通過する場合に限られていた。従って京都についての記述もケンペル一行やシーボルトなど数例の記録が知られている程度であろう」と、オランダ商館長江戸参府の随行員の旅行記について言及した。Rutherford Alcock(以下オールコック)は『大君の都<sup>9</sup>』を著すにあたって「ケンペル(ケンペル<sup>10</sup>)、トゥーンベリ(ツンベルグ<sup>11</sup>)、その他の人びとの著作(日本人ないし日本の国とその制度についてのべようとしたさいきんの全著作は、主としてこれらの人びとの寄せ集めである)にざっと目をとおしてみた」(山口(訳)、1997)と述べた。オールコックの示した「その他の人びとの著作」について、川内有子(2020)は「オールコックが来日した時期にイギリスにおいて日本に関する知識を供給していたのはまさしくこれらの『編集物』であった」と述べ、イギリス、アメリカ両国で出版された具体的な著作を挙げた。これらの指摘から、TGについても、

古い西洋人旅行記やそれらを編集した書籍から、影響を受けた可能性がある。

本稿では先行研究で示された、オランダ商館長江戸参府に随行した Engelbert Kaempfer(以下ケンペル)、Carl Thunberg(以下ツンベルグ)の旅行記の内容を調査し、また、それ以前の時代に、膨大な量の日本についての記述を残した、織豊時代のイエズス会神父 Luis Fróis<sup>12</sup>(以下フロイス)の記述を取り入れて、調査を行った。するとケンペル以降と指摘されていた名所の誤情報が、遡ってフロイスから始まり、フロイス以降の文献に誤転載され続けたことが、「三十三間堂」で確認されたので後述する。なお本稿では、TG刊行以前に発行された、来京西洋人の著作の全てを網羅していないが、この3名の著作は日本についての代表的な著述であり、明治初期の西洋人観光客には、良く認識されていたと考える。

## 3. TG内の京都記述部分の比較調査

入京が厳しく制限されていた、古い西洋人の京都名所訪問は、日本側主導で行われ、その古い西洋人旅行記には、以下のような名所が記されていた。TG内の京都記述部分の比較調査を行う前に、古い西洋人旅行記に記述された京都名所を、表-1にまとめた。

表-1から、三十三間堂がフロイス、ケンペル、ツンベルグとも訪問箇所に入っていることがわかる。大仏(方広寺)<sup>16</sup>はケンペル、ツンベルグが訪問しているが、フロイスの時代には、まだ建立されていない。

さてTGに挙がる名所は京都市中で31か所、自然体験が1か所、その他3か所(宇治、奈良、琵琶湖<sup>17</sup>)である。奈良の内容については本稿では扱わない。

表-2は、TGに記述のある名所をグループに分け、示したものである。縦列は(1)覚馬名所案内にも共通してある名所、(2)はTGにはなく覚馬名所案内のみある、(3)はTGにのみ、新出する名所である。横行はKGが受けた影響や、新たな独自の記述が見受けられるものとし

表-1 フロイス、ケンペル、ツンベルグの記述から訪問を確認した京都名所(カッコ内は訪問年)

人物 名所	フロイス (1564) 『日本史3五畿内編 I』	ケンペル (1690、1692) 『江戸参府旅行日記』	ツンベルグ (1776) 『日本紀行』
訪問した 京都名所	三十三間堂、東福寺、祇園社、公方様の屋敷、御所、清水寺、大徳寺、金閣寺、知恩院、東寺	1690年江戸からの帰路：知恩院、祇園社、清水寺、大仏殿(方広寺)、三十三間堂 1692年江戸からの帰路：知恩院、祇園社、八坂塔、清水寺、大仏殿方広寺、耳塚、三十三間堂	大仏寺、三十三間堂

(出所：『日本史3五畿内編 I』、『江戸参府旅行日記』、『日本紀行』の記述に確認された寺社を元に筆者作成)

表-2 TGと覚馬名所案内にある京都とその近郊の名所の比較と影響

比較 影響	(1)共通	(2)TGにない	(3)TGに新出
A. 古い西洋人旅行記	2. 大仏(方広寺)⑱、5. 三十三間堂⑳、6. 清水寺⑰、9. 耳塚㉑、12. 東寺㉒、16. 17. 衣笠山と金閣㉓、24. 知恩院⑤、31. 東福寺㉔	祇園④、大徳寺⑥	4. 高台寺
B. 京都博覧会	11. 西本願寺㉕、15. 御室(仁和寺)⑳、24. 知恩院⑤、26. 27. 御苑、宮城-御所③		1. 建仁寺、20. 修学院離宮、28. 桂離宮、お茶屋遊び
C. 文明開化の新産業	18. 西陣㉖ 清水の陶器⑰ 33. 宇治㉗		1. 建仁寺、29. 勸業場の織工場、京都府庁(二条城)、裁判所、新産業施設群、京都駅、大阪造幣局、琵琶湖(蒸気船航路)、土産物購入
D. 観光地の取捨選択	7. 西大谷⑱、19. 上賀茂⑳、21. 下鴨㉑、22. 銀閣寺㉒、23. 若王子㉓、25. 円山㉔、32. 泉涌寺㉕、(30. 川下りの部分で)嵐山㉖、33. 宇治㉗、35. 琵琶湖(大津、堅清涼寺㉘、北野㉙、鴨川堤)㉚ 4⑤、瀬田、粟津、石山⑥ 黒谷⑧、比叡山④	三条大橋②、南禅寺⑥、永観堂⑨、真如堂⑩、吉田⑪、東大谷⑬、黄檗⑭、本圀寺⑭、石清水八幡宮⑳、長岡天満宮㉑、梅宮㉒、稲荷㉓、清涼寺㉔、北野㉙、鴨川(鴨川堤)㉚	10. 東本願寺 34. 奈良
E. 付加価値、推薦、旅行体験	3. 八坂塔⑮、6. 清水寺⑰、17. 金閣⑰		土産物購入 将軍塚からの俯瞰祭(大文字送り火) 29. 勸業場の織工場 30. 保津川下り
F 意図不明確			8. 明暗寺、13. 神泉苑、14. 愛宕権現

(出所：Tourists' Guideと覚馬名所案内に記述された京都名所をもとに筆者作成)

て、A. 西洋人旅行記、B. 京都博覧会、C. 文明開化の新産業、からの影響と、D. 観光地の取捨選択、E. 付加価値、推薦、旅行体験、F. 意図不明確、に分けた。名所の前の数字1、2、3…はTGの登場順、名所の後の数字①②③…は覚馬名所案内の登場順であり、便宜上筆者がつけた数字である。項目の前の数字がないものは、TGの1項目で述べられたものでなく、一般並びに俯瞰情報の記述で出た名所や体験である。複数の影響を受けた名所はそ

れぞれに示した。TGの個々の京都名所に関する記述内容については拙資料翻訳<sup>9)</sup>にある。

#### 4. 考察

TGと覚馬名所案内の比較を表-2で行った結果、TGにははっきりと、古い西洋人旅行記、京都博覧会、覚馬名所案内からの影響と、新たな付加価値と推薦箇所、行動が示された。覚馬名所案内の表現や数字が良く似ている所は、その都度

示した。

#### 4-1 A. 古い西洋人旅行記による影響

表-1で、古い西洋人たちが訪問した場所が特定されたので、その結果をもとに考察する。その中でも、特に三十三間堂、大仏(方広寺)という西洋人の訪問が多かった名所と耳塚について述べる。

A(1)は、TGと覚馬名所案内との共通部分であり、古い西洋人旅行記の影響があったことが確認された。表-1をみると、3人の西洋人は共通して、5. 三十三間堂㉑を訪問している。鎖国中にオランダ商館長江戸参府に随行した、ケンペルとツンベルグの江戸から長崎への帰り道では、5. 三十三間堂㉑の他には2. 大仏(方広寺)⑱が訪問された。ケンペルは1692年には、それら2社寺に近い耳塚も訪問した。

三十三間堂は、12世紀創建の宗教都市京都を象徴する国宝である。今回の調査で、三十三間堂の仏像の数の記述から、古い西洋人の参考文献からの影響が確認された。TGには「これらの像は33,333体あると思われる<sup>19)</sup>」との記述がある。江戸時代のシーボルトによる『1826年の江戸参府紀行』を全訳した斎藤信は、シーボルトが記した33,333という数字について「ケンプツァー以来の誤りで、33,033でなければならない。堂内には1,001体の十一面千手観世音菩薩の像があり、観世音菩薩は衆生済度のため必要に応じて三十三身を示顯する、と法華経にあるところから、33,033体の観音として信仰されている」(斎藤(訳)、1981)と注の中で述べた。そのケンペルの誤りは、1690年の訪問の際の記述に「仏像の数は33333体に及んでいる。それでこの寺は33333体仏の寺とも呼ばれている」(ケンペル、斎藤信(訳)、1979)とある。また、1692年の訪問においても「すべての仏像の頭や手の上にある小さな仏像を加えれば、33333体になるという」との記述がある。これらのケンペルの記述から、それ以前の誤情報の有無を遡って調査すると、フロイスの1565年の書翰にも、同様の誤りが確認

された。その部分は「この堂内に安置する観音像の数は33333体あるという」（フロイス、柳谷（訳）、1966）である。数字の誤情報、フロイスの時代から後々の西洋人旅行記に、そのまま誤転載され続けたのである。

次に三十三間堂と大仏（方広寺）、耳塚の共通点であるが、第1に位置的に大変近い。『国宝三十三間堂』によると、明治以前、三十三間堂と方広寺を含む土地は、広大な妙法院の境内であった（妙法院門跡、2006）。大仏（方広寺）の正面には、おのずから興味深い石塔である耳塚は目につきやすい<sup>20</sup>。第2に、これら3か所は、京都を拠点とした16世紀の為政者で、古い西洋人旅行記にも知られている、豊臣秀吉とのつながりが深い<sup>21</sup>。これらの理由から、3か所が一つのセットとして、西洋人観光客の興味を引いた、と考えられる。新出のA(3)の高台寺も豊臣秀吉に関係する寺である。

さて長谷川雅世（2015）は、明治時代のイギリス人旅行者たちの旅行記に登場する重要な京都の寺々において、特に京都の大仏を取り上げ、方広寺の特異性は日本三大梵鐘に数えられる釣鐘にあった（長谷川、2015）とした。そして「鐘以外には大仏像が、イギリス人旅行者の興味を引いた」（ibid.）とし、またその理由を「1798（寛政10）年に落雷による火災のため消失し、明治時代の大仏は縮小された半身だけの像だった。それでも、大仏が方広寺を観光名所にしていただようである」（ibid.）と述べた。なぜ、それでも大仏が明治期に観光名所であったか、という点について、表-1に示された西洋人旅行記の影響が考えられる。例えば1776年、焼失前の大仏をみたツンベルグは「誠に巨大なその大きさは、驚怖と尊敬の念を起こさしむるに充分であると、私は思った」（ツンベルグ、1991）と述べた。明治時代の大仏は、現実には半身しかなく、大鐘も野ざらして無残な姿であったが、壮大な姿を伝える古い西洋人旅行記を先入観として持つ、TGや明治初期外国人旅行者にとっては、大仏（方広寺）は訪

れるべき、感激を体験すべき名所であった<sup>22</sup>。

TGには実際の大仏、または方広寺を見た感想はない。内部の盧舎那仏については、「160フィート（約48.8m）あるとのこと<sup>23</sup>」と覚馬名所案内と同じ数字を記述した。大鐘についてのTGの記述内容には不確かな部分があり、実際に大鐘を見に出かけたかは不明である<sup>24</sup>。

A(1)の24. 知恩院⑤については、ケンペルの1692年の旅行記に、「とてつもなく大きな釣鐘の所に行ったが、それはモスクワにある二番目の巨鐘と同じくらいで、長さ、つまり高さがあり長すぎたので、均整がとれていなかった<sup>25</sup>」と、その大きさとユニークな形状に驚いた様子を述べた。TGにおいても、「京都の不思議の1つ」として、知恩院の大きな梵鐘は必見である、と紹介されている。

A(2)にある祇園④は円山、知恩院に隣接する現在の八坂神社である。大徳寺⑥とともに、削除原因は現在のところ不明である。

#### 4-2 B. 京都博覧会による影響

次にBの京都博覧会による影響であるが、覚馬名所案内の影響を調査する中で、覚馬名所案内の刊行理由である京都博覧会が、大きく京都国際観光に影響を与えたことがわかった。B(1)には11. 西本願寺⑭、15. 御室（仁和寺）⑮、24. 知恩院⑤、26. 27. 御苑、宮城-御所③があり、B(3)には1. 建仁寺、20. 修学院離宮、28. 桂離宮、お茶屋遊びがある。これらは全て京都博覧会の会場、また関連して公開された皇室関連施設、格式の高い寺々であり、京都博覧会の附覧から発生した観光文化体験であった。

京都博覧会の開催された1872年までは、多くの西洋人の認識において、京都は帝が居住する閉ざされた都であった。兵庫港開港直前の1867年に刊行された、*The Treaty ports of China and Japan*…の中で、Dennysは「帝」について、「大変神聖な存在であり、天照大神の子孫であるこの人物は帝と呼ばれ京都（都とも

いう）に住んでいる<sup>26</sup>（筆者訳）」（Dennys、1867）と述べた。今まで誰も見る事ができなかった施設、建物を訪問することは、旅行先の国での見る価値と行く価値のある、観光旅行の醍醐味であったと思われる。

B(1)ではキーリングが京都博覧会の影響を受けて、実際に訪問したことがわかる、御室御所と御所を取り上げる。

御室御所は仁和寺のことである。TGには直接見学した様子と感想<sup>27</sup>が記述され、「今まで帝の聖なる場所で非公開だったのが、急に一般公開されたため、数千人の人々が好奇心をもって来場した」と記述し、京都博覧会なしには、仁和寺が有名にはならなかったと考えられる。

御所については、覚馬名所案内では御所の利用はまだ初期であり、詳細な記述はない。TGの時代になると、御所内の実際の見学の様子が明らかになった。京都在住の人から、参観順路についてアドバイスを受けた<sup>28</sup>、と記述しているところが興味深い。当時の参観順路<sup>29</sup>は、現在は外から観るだけであるが、御所の建物内にまで開かれており、内部の美術品なども実際に鑑賞した様子が記述された。

B(3)の修学院離宮、桂離宮（桂宮御殿）は『京都の歴史8』によると、「1879（明治12）年」（京都市、1975）に一般のひととの参観が許されたので、覚馬名所案内には掲載されていない。修学院離宮は庭園と木々の美しさと、京都の市中やその周辺が俯瞰できること、また桂離宮は最も人気のある場所の一つと記述された。両者とも簡潔に書かれており、TGが実際に両離宮を訪問したかは不明である。

お茶屋遊びについて、京都博覧会での附博覧の一つであった「都踊」の影響は大きい。『京都博覧会史略』によると、都踊は明治5年の附博覧として創始され「特別入場料を徴取したもので、極めて広義の附博覧であった」（大槻喬、1937）とあり、「開場一番内外人の讃嘆を受け京都名物の一となった」（ibid.）。都踊として一般の京都博覧会参観客のおもてなしを担った芸舞妓たちは、それ以降外国人観

光客に対してお座敷遊びという文化体験を担った。

#### 4-3 C. 文明開化の新産業

京都の文明開化の産業施設について、当時の最先端国であるイギリス人には、興味深かったかどうかは定かではない。しかしキーリングは、TGに現地ガイドの案内や説明を反映させたようである。

C(1)の18. 西陣<sup>39</sup>には、京都の絹織物産業の進展がわかる部分がある。覚馬名所案内では、「外国産の品物よりずっと安価に生産され、価値ある品物として貿易された<sup>30</sup>」記述があるが、TGには「安値の海外製品におされて、貿易で伸び悩む様子が見て取れる<sup>31</sup>」とあり、貿易の当初は順調に輸出されたものが、その後海外との価格競争に苦心していた状況であった。

C(3)の1. 建仁寺について興味深い記述がある。建仁寺は「1872年に開催された博覧会会場の一つ」とTGには記され、「建仁寺の多数の芸妓 (*geisha*) が養蚕に従事した様子を見学した。これは当時、女紅場<sup>32</sup>で芸妓たちが職業訓練を受けていた様子と思われる。

C(3)の多数の西洋風建築物は、將軍塚からの俯瞰により紹介された。鴨川の西側の堤防には、舎密局<sup>33</sup>、染殿<sup>34</sup>、舎密局付属の石鹼製造所があり、舎密局の上部には小さな白い塔、南には集産場<sup>35</sup>、織殿が見える、と述べている。南西には大阪造幣局の煙突が見える、と述べた。覚馬名所案内の銅版地図には「勸業場」はあるが、それ以外の新産業施設は確認できない。また当時最先端の小学校施設<sup>36</sup>を黒い点で示して、文明開化をアピールしたが、TGでは触れていない<sup>37</sup>。

勸業場の織工場は、名所の1項目として挙げられた。「河原町の角倉了以屋敷跡の新築の立派な準洋式建物では、綿や絹製品が製造され、大量の絹製品がアメリカに輸出された。警察、兵士の制服がここで製造されている、隣接の庭園は特に美しい」と記述された。新産業施設を紹介しつつも、イギリス人の国民的趣味で

ある庭園鑑賞という付加価値があったので、E(3)にも該当する名所である。なおKGでは織工場は記述が省かれることから、TGの時代ののち、京都のイメージは、文明開化の産業都市よりも、古都に近づくことが考えられる。

#### 4-4 D. 観光地の取捨選択

ここでは覚馬名所案内にある名所の取捨選択が明確になった。

D(1)に分類した35. 琵琶湖については、覚馬名所案内では、従来の近江八景の美しい風景を紹介したが、TGでは、京都とは別章に分けられ、「魅力あふれる美しい風景」と、大津京の歴史、唐崎の松を含む名所が簡潔に述べられた。ここでは、覚馬名所案内の「風流で美しい」と思う、近江八景の「見せたい」情報と、西洋人が安全で、スムーズに日本国内を移動するための「欲しい」情報へのシフトが見られる。TGは京都記述部分の概略において「京都は、行って良かった、と称賛される琵琶湖への小旅行ができる圏内」にあるとしながらも、琵琶湖の新情報として、湖港の紹介と、最新の旅行ルートである蒸気船航路を推薦し、京都から敦賀まで抜ける旅行手段を示した。琵琶湖は景観地でありつつ、重要な旅行ルートの役割を担うこととなった。

同じく(30. 川下りの部分で)嵐山<sup>38</sup>は、覚馬名所案内では嵐山自体の景観美を述べているが、TGでは、主に新観光体験の保津川下りの下船場所であり、京都中心地のホテルに帰るための、大切な交通の便である人力車を回送しておく場所であった。

D(2)の、削除された名所については、はっきりとした理由はわからない<sup>38</sup>。しかし、4-3で述べた、東山にある將軍塚からの京都盆地の俯瞰で、見える範囲が関係した可能性はある。TGは俯瞰ののち、「京都の地勢がわかったので、以下に挙げた名所観光はより楽しくなりますよ」と述べて、個々の名所を紹介する。

D(3)には10. 東本願寺(再建1895年)がある。覚馬名所案内に無いのは、TG

が「1864年の内戦で大火となり、有名な3基の門も含めて建物は焼失した」と説明する、禁門の変が影響したと思われる。東本願寺で興味深いのは、同時代のHTが取り上げなかった、熱心な海外への布教活動を、独自取材で取り上げたことである。キリスト教信仰者たちにとっては、仏教の海外布教活動は大きな関心事であったと思われる。しかし例えば、田中まり(2004)によると、東本願寺についてのHTの記述は「再建のための全国からの寄進、髪の毛で作られた綱」があるのみで、布教活動についてはない。長谷川雅世(2015)は、イギリス人旅行記に頻繁に東本願寺が登場し、「一瞬それは奇妙に思われる」が、その理由は「再建中、あるいは、再建されたばかりの東本願寺を明治日本の仏教信仰の様を象徴するものとして観察した」(長谷川、2015)と論じた。中西直樹(2013)によると、当時東本願寺は日本「政府と協調してキリスト教の防止策を展開」していた。そして1876年には上海別院を開き、「毎日のように中国語による現地人対象の布教が行われたようである」(中西、2013)と述べた。TGの独自取材で、再建中ではあったが、積極的に外に出て活動した、東本願寺の様子が明らかになった。

#### 4-5 E. 推薦、付加価値

特に推薦する名所や体験については、西洋人の独自視線から付加価値が見いだされ、また読者に向けて強く勧めた場所や体験を挙げた。

E(1)については、3. 八坂塔<sup>39</sup>、6. 清水寺<sup>40</sup>、17. 金閣<sup>41</sup>がある。

八坂塔については、ケンベルの1692年の訪問の際、「八坂の五重の塔の傍を通り」とある。TGでは「最上階から素晴らしい風景が見られる」という付加価値があった。

清水寺はA(1)にもあり、フロイスが「ここには絶えず巡礼者が殺到し、すぐれた水の泉があり、——素晴らしい眺めをもった所で、日本で非常に有名である」(柳谷(訳)、1966)と述べるほど、鎮国以前

に訪問した西洋人が感嘆するような名所であった。TGにおいても、'The Kiyomidzu is a delightful and picturesque spot'、と同じ感想を述べている。新しい付加価値として、TGでは縁結びの神である地主神社が登場した。「良き伴侶を探す未婚の男女が訪れる小さな神社」では、おみくじの効果的な結び方まで紹介された。また「清水には沢山の焼き物店が寺の参道にあり、最上の陶器と磁器が調達できる」、と土産物情報を書いた。清水寺においては、風光明媚な景色に加えて、従来の寺社仏閣めぐりに、新しい魅力である愛の占いが加わり、効率的な土産物の購入ができる、という観光環境が、付加価値として早い時点からセットになった。

また、清水寺の拝観人数については、覚馬名所案内との比較で、興味深い記述がみられた。覚馬名所案内の初版と後期の版との間には、拙論（2020）で述べたように、数年間での明らかな参拝者数の増加があった<sup>39</sup>。TGには「数千人」の規模と記述され、それは「1日あたり」、という記述がないため比較はできないが、これら3冊が、特定の名所を訪問する人数に関心をもつこと自体も興味深い。

同じく、A(1)にもある金閣寺について、フロイスは「回廊がついた上層は全部金箔が押しあつた」きらびやかな金閣内部を見学した。TGには、内部が拝観できた様子はないが、金閣寺は観光寺院として、明治期の早くから内外の観光拝観客対応が整っていた、という興味深い点が2点確認された。1つは拝観料の存在である。TGの京都記述部分の寺社仏閣において、唯一「拝観料は1人2.5銭<sup>40</sup>で本堂の入口で支払う」システムがあった。2つ目には、寺内には案内役がいたことである。案内役は「ガイド（少々のチップを期待している）」と記述された。寺内ガイドに連れられ、実際に見学した時の拝観順路は<sup>42</sup>、現在もほとんど同じである。使用言語は不明であるが、国際観光の早い時点から拝観中に寺内ガイドをつける、という付加価値があった。

E(3)については、まず初めに、土産物

購入について述べる。

覚馬名所案内では、清水焼の陶器、西陣織のショールなどの絹製品、宇治の茶を挙げている。TGでは、粟田焼または七宝焼といわれる磁器、漆塗製品、銅製品、絹、ちりめん、刺繍製品、扇などの特産品を大変有名だと薦め、土産物購入自体が重要な旅の目的として紹介された。これにはケンペルの「京はいわば日本における工芸や手工業や商業の中心地である<sup>43</sup>」（ケンペル、斎藤（訳）、1979）と記述されたことから、京都が鎖国中にも、工芸、手工業、商業の中心地であつて、優れた土産物の聖地であったことを、TGは良く認識していたと思われる。KGでは「どの訪問者も一日は十分な時間を取って、窯元や刺繍業者に見学に行くべきだ」と、わざわざ追加されることから、TGの時代は、まだ土産物購入がブームとなる初期の段階で、その後、より盛んになったと思われる。

眺めに関しては、4-3、4-4でも触れた、將軍塚が特に推薦された。覚馬名所案内では、円山地区の高台のホテルからの眺めを薦め、同時に京都盆地を真上から真下に撮影したような、詳細な銅版地図を目次の次に添えた。TGには地図はなく<sup>44</sup>、京都盆地と各々の名所の方向がより鮮明に俯瞰できる將軍塚に上るよう強く推薦した。「人が通れるように整備されており全く問題なく登れる<sup>45</sup>」と述べ、キーリング自身が將軍塚に上り、そこからの眺望を気に入ったようだ。

祭りについては、大文字送り火（“Bon” fires）を將軍塚から鑑賞して、「8月16日の夜は特に鮮やかである<sup>46</sup>」と読者に推薦した。実際に送り火を見ながら、地元ガイドに質問して、記述したと思われる記述がある。「Ichiwa」という地区の始めの一文字を表す文字がある、との記述から、現在は失われた送り火の存在<sup>47</sup>が、明治時代の西洋人による英文ガイドブックからわかり、大変興味深い。

キーリングの祭紹介には、祇園祭がない。例えばHTにおいては、京都の代表的な祭の1つとして紹介される。祇園祭

は、1879年の夏、コレラ流行のため、秋に延期<sup>48</sup>された。京都取材旅行期間の可能性も含め、後述する。

30. 急流下り（保津川下り）という自然冒険体験は、寺社仏閣めぐりが主な京都観光であった外国人が、飛びつくような心躍る新観光行動であった。出発点の城下町亀山は、明治2（1869）年3月25日、「伊勢国亀山との混同をさけるため丹波国亀山を亀岡に改称」（京都府立総合資料館、1971）されたが、TGでは‘Kameyama’と書いている。

TGは実際の行程管理として、京都での人力車の手配、人力車を舟に載せた場合には費用がかかる事、人力車を嵐山下船場まで回送させる知恵、‘coolies’である荷物運び人の手配、到着時の茶屋での休憩、軽食、適切な船乗り場の選定などを説明、紹介し、ガイドブックとして読者に多大な安心感と期待感を与えた。しかし記述の中には、不安点も見受けられる。例えば京都から亀岡への道中、人力車からの降車が必要な険しい場所がある。「沓掛から山本乗船場まで歩く」という旅のヒントであるが、実際には長距離のため、徒歩では少し、無理があるようにも思われる点である。

TGの保津川下りでは、この自然と冒険の体験を自身が大変気に入り、主観的、また独自性を持って記述された。それらを確実にするために、HTの記述との比較を行ったところ、HTは行程管理、経費などの客観的情報が明確に述べられたが、個人的な感想は見当たらない。TGには川下り中のスリリングな舟の動きや水しぶき、困難に立ち向かう船頭の様子が描かれた。文章の最後には「女性の皆さん、この急流下りを怖がる必要はありませんよ。今までに事故があったかどうか、聞いたことはありませんので」、と英国紳士のウィットを利かせて述べ、あたかも旅行体験談を読者が追体験することが目的となっている。

西洋人の保津川下りについて、保津川遊船企業組合（n. d.）の船乗り場に掲げられた説明によると、「1920年にはルーマ

ニア皇太子、1922年英国皇太子<sup>49</sup>」が川下りを楽しんだ。また、保津川遊船企業組合のホームページには「明治28年頃から、遊船として観光客を乗せた川下りがはじまった」(保津川遊船企業組合 (n. d.))、と説明があることから、TGは、世界で初めて英語で保津川下りを紹介し、西洋人観光客の保津川下りが、有名になるきっかけを作った可能性は大きい。保津川下りの始まりについては、不明点が多いので調査を続ける。

最後にF(3)の新出の名所は、8. 明暗寺、13. 神泉苑、14. 愛宕権現であるが、TGが実際に訪問したかどうか、またなぜ選んだのか、意図不明確な名所である。東福寺塔頭・善慧院の公式ホームページによると、「明暗寺は、禅宗の一派・普化宗のお寺で、「虚無僧発祥のお寺」として知られて<sup>50</sup>」いる。例えば『大君の都』の挿し絵<sup>51</sup> (山口、1997)にも登場するので、イギリス人には、奇妙で興味をそそる職業であったと思われる。愛宕権現については、TGの「東京」記述部分において、絵のように美しい風景を、全方向で見晴らせる場所として、東京の愛宕山を紹介し、実際に上った様子がわかる。そのキーリングの愛宕山への親しみが影響し、京都の愛宕権現を紹介した可能性は考えられる。

以上のように分析と考察を行い、TGには西洋人の嗜好や、観光すべき価値のある観光地、観光行動が選択され、編纂者自身の旅行体験記とも思える記述が認められた。

## 5. まとめ

本稿では、イギリス人による日本初の英文日本ガイドブックを、京都記述部分に限定して、日本人による日本初の英文京都ガイドブックとの比較分析を行い、古い西洋人旅行記の影響と、京都の人々の国際観光政策がTGに与えた影響、そしてTGが西洋人嗜好のまなざしのもと、取捨選択し、新たに付加価値をつけ、新観光行動を推薦した経緯と理由を明らかにしようとした。

その結果、TGの選んだ名所は、明治初期からその名所選定が始まったのではなく、すでに古い西洋人の京都名所訪問の記録が、西洋人読者の先入観として、強く影響したことがわかった。そしてキーリングは、それらの名所の数々を体験したい、という西洋人観光客の思いを、TGに反映したことが明らかになった。実際には大仏(方広寺)はその状態が良くなくても、明治時代初期の京都において、訪れるべき憧れの名所であった。TGは限られた旅行期間内に、西洋人観光客がいち早く、書物でしか知りようのなかった、それらの名所を的確に訪問できるよう、説明を加えて編纂し、それが実際の明治期の西洋人観光につながった。三十三間堂の仏像数の間違いの連鎖は、旅行記がそれ以前の旅行記を参考にし、情報を得て発展していく過程で起こった。

比較対象とした覚馬名所案内については、TGの内容に、覚馬名所案内の説明内容、英語表現、対象物の寸法など、記述と似た部分は存在した。しかし、同じ名所の調査をすれば、一般的には同様の記述になるので、一概に覚馬名所案内から直接、文献として引用したとは言えない。しかし名所選定、及び各々の名所の見どころの参考にされたことは事実である。

編纂者キーリングの京都取材期間について、TGは何ら触れておらず、特定は難しい<sup>52</sup>。しかし、何点か手がかりを確認した。1点目は、1. はじめに、で示したキーリングの雇いの契約期間において、1879年8月のひと月は、契約から外れていること<sup>53</sup>、2点目は、4-2で述べた、離宮の参観が同年から始まったこと、3点目は、4-5で述べた、有名な祇園祭が、同年の夏は延期になったが、大文字送り火は催行されたことである。これらの手がかりから、初版刊行前年の1879年夏の可能性はあると考えられる。

本稿の調査の過程において、覚馬名所案内の影響以上に、覚馬名所案内の母体である京都博覧会が、TGの内容に大き

く影響したことが明らかになったのは、興味深い気づきであった。京都博覧会の会場となった宮城、離宮、格式の高い寺社仏閣は、京都博覧会の「お墨付き」を得、内外の博覧会参観客に、壮麗な建物、所蔵する芸術品や重要な品々を見せ、「千年の都京都で観るべき」名所として認識された。京都博覧会が継続的に開催されたことは、京都が安定した、信頼できる国際観光地である認識を西洋人観光客にもたらした。

「鳳駕御東遷の後を受け、満都の市民色を失して茫然為すところを知らざるに際し、狂瀾怒濤の大洋に敢然と棹した豪商三井八郎右衛門、小野善助、熊谷直孝の三氏は(中略)1つには産業振興のため、また1つには今日でいう観光都市として生きんがため、茲に京都博覧会の開設を企劃したのが実に明治4年の夏であった」と京都博覧協会史略は述べる。その後、京都博覧会が、京都の生存を賭けて、国際観光事業成功のためのツールとして制作したのが、覚馬名所案内である。

覚馬名所案内の序文には「自国に土産話をもち帰るために、有名で素晴らしい場所をちゃんと訪問できるかご心配でしょう。そんなとき、このガイドブックを持って便利さを確かめてください」(筆者要約、山本覚馬、1873)とある。これは山本覚馬が、観光目的以前の商業、貿易で京都を訪れた西洋人に照準を当て、その嗜好を推量し、日本側からの「見せたい、売りたい」京都をアピールし、その後帰国した西洋人が、自国で京都観光の体験を広め、その結果、京都に対する興味と憧れを高めた観光目的の訪日客が増えることを期待した部分である。TGに京都側の思惑が反映されたことで、京都博覧会の目指す国際観光戦略は成功した。

TGには、当時の産業都市京都の姿が描かれ、観光の付加価値については、占い、ショッピング、寺内ガイド、音楽、花木、庭園など、キーリングの興味と嗜好に基づいた主観的記述が含まれた。附覧から始まった芸舞妓のショーやお座敷

遊びは、西洋人の京都観光行動の、安心して楽しめる定番となった。特に、川下りという自然体験はキーリング自身の旅行体験記であり、読者にとっては心躍る京都観光の新たな魅力、憧れとなり、京都の観光価値を高めた。

覚馬名所案内が参考にした文献について、古い西洋人旅行記の影響や、京都の人びとが、過去に重要な外国人ゲストをもてなす社寺があった記憶が、影響した可能性がわかり、大変興味深い。覚馬名所案内、TGで挙がった名所とともに、今後も調査を続ける。

TGの京都記述部分は、西洋人が、16世紀からの京都訪問記から得た知識を先入観としてもった「追体験したい京都」と、明治初期の京都における、国際観光都市という手段で生き抜くための日本側の「魅力ある京都」の売り込みが複合し、編纂者キーリングの新たな感動や感想を率直に描いた新名所、新観光行動が加わったものである。

TGは、京都国際観光の黎明から、一歩前進した明治初期の京都の姿を知るための、貴重な歴史史料であり、旅行体験記である。

## 注

<sup>1</sup> Keeling, W.E.L. (1880). *Tourists' Guide to Yokohama, Tokio, Hakone, Fujiyama, Kamakura, Yokoska, Kanozan, narita, Nikko, Kioto, Osaka, etc., etc.* Yokohama: Sargent & Farsari Co. [https://visualizingcultures.mit.edu/gt\\_japan\\_places/tg\\_01.html](https://visualizingcultures.mit.edu/gt_japan_places/tg_01.html) 閲覧日：2020年11月5日。広告を除き92ページある。

<sup>2</sup> Keeling's Guide to Japan, Yokohama, Tokio, Hakone, Fujiyama, Kamakura, Yokoska, Kanozan, Narita, Nikko, Kioto, Osaka, Kobe &c., &c., Together with Useful Hints, History, Customs, Festivals Roads &c., &c., with Ten Maps, Fourth Edition, Revised And Enlarged by A. Farsari [Second

Issue], Yokohama, A. Farsari for sale by Kelly & Walsh Limited' である。

<sup>3</sup> 伊藤は長い間キーリングの人物像を調査していたが、「なんの手がかりもなく、いかなる人物か何もわからなかった（伊藤、2009）」。しかし、ついに福沢諭吉書翰の調査からキーリングについての糸口を見つけた。キーリングの人物像は大変興味深いのが、本稿は京都記述部分の内容に焦点をあてる。

<sup>4</sup> Yamamoto, K. (1873). *Celebrated Places in Kiyoto and the Surrounding Countries for the Foreign Visitors*, Kyoto: Niwa. 宇治市歴史資料館に所蔵されている。

<sup>5</sup> Yamamoto, K. (1873). *The Guide to the Celebrated Places in Kiyoto and the Surrounding Places*, Kyoto: Niwa. <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1900016> 閲覧日：2020年11月5日。初版と同じく、山本覚馬著丹羽圭介発行である。

<sup>6</sup> HTは「明治5年横浜に設立された日本アジア協会（The Asiatic Society of Japan）に集積された日本情報の公刊でもある英文日本旅行案内記」（荒山、1991）であり、多くの西洋人日本観光旅行者の信頼を得た。

<sup>7</sup> HTを指す。

<sup>8</sup> HTを指す。

<sup>9</sup> 原著は、Sir Rutherford Alcockの *The Capital of the Tycoon: A Narrative of a Three Years' Residence in Japan*, 1863年である。

<sup>10</sup> エンゲルベルト・ケンペル（Kämpfer, Engelbert, 1651-1716）はドイツの博物学者で医者でもあった。1690年来日し、元禄年間の日本で短い間に二度もオランダ商館長に随行して江戸参府を果たした。『日本誌』は死後11年経った1727年に刊行された。（早稲田大学図書館所蔵貴重資料、日本誌。Waseda University Library, 1996. First drafted February 18, 1998. Last revised November 25, 2005. <https://www.wul.waseda.ac.jp/collect/yo/ae3110.html>

閲覧日：2021年2月5日。

<sup>11</sup> ツンベルグはスウェーデン生まれ、植物学者・医者。オランダ東インド会社に入り、1775年長崎オランダ商館の医者として来日、翌5年商館長に随行して江戸参府、『日本紀行』はこの間の記録である（ツンベルグ（1991）『日本紀行』『史料京都見聞記第二巻』駒敏郎、村井康彦、森谷尅久編集、法蔵館。定本『異国叢書』一、駿南社、250ページ。

<sup>12</sup> 日本大百科全書（JapanKnowledge Lib）から概要をとると、ロイス・フロイス [1532-1597] は織豊時代に日本で活躍したイエズス会司祭。リスボンに生まれ、1563年来日、1583年にはローマのイエズス会総長から「日本の布教史」を執筆するよう訓令を受け、フランシスコ・ザビエル以後の布教史の執筆に専念した。膨大な『日本史』の原稿の行方を案じながら65歳で病死、フロイスの書簡や年報はほとんど大部分が早くヨーロッパで刊行され、各国語版が出された一方、『日本史』は久しく原稿がマカオの修道会の倉庫に埋もれたままになり、写本も世界各地を転々としたので、1977～1980年に日本で初めて日本語に活字化されるに至った（松田毅一、2018年2月16日）。

<sup>13</sup> 238-261ページを参考にした。「公方様の屋敷」は当時の二条通りに面した幕府所在地、「御所」は現在と同じ所在地である、と書かれている。先述したように、キーリングの時代には『日本史』は刊行されていないが、書簡の翻訳は出回っていた。

<sup>14</sup> 224-233, 301-309ページを参考にした。

<sup>15</sup> 253-255ページを参考にした。

<sup>16</sup> TGでは'Daibutsu, or as it is frequently called Hokoji' と記述される。本稿では大仏（方広寺）と記す。表1にある名称は、それぞれの訳者の表現を使用した。

<sup>17</sup> TGでは、奈良は京都の中に含まれ、琵琶湖は、京都のすぐあとに、別章の'Biwa Lake'としてある。覚馬名所案内

- では京都の近郊として紹介されるため、分析対象とする。
- <sup>18</sup> 千代問泉 (2021年3月発行予定)「[資料翻訳] W.E.L. Keeling 編纂『横浜、東京、、、京都へのツーリストガイド』(1880)の京都記述部分」同志社女子大学大学院紀要、第21号。
- <sup>19</sup> 原文では 'The total number of these idols is supposed to be 33,333.'である。
- <sup>20</sup> TGには、耳塚の記述は5行ほどと少ないが、KGには、耳塚は絵入りで紹介され、「変わった形の碑は上から、チャ=天空、カ=風、カ=火、ワ=水、ア=地の順である。同じシンボルが日本の多くの墓に見られ、耳塚はわかりやすい例である(筆者要約)」と説明がある。
- <sup>21</sup> 三十三間堂における桃山期の大整備(妙法院門跡、2006)、大仏(方広寺)創建、朝鮮出兵である。
- <sup>22</sup> 同時に覚馬名所案内にも、良い状態とは言えない大仏についての記述がある。古い西洋人旅行記の影響、及び京都の人びとが、過去に重要な外国人ゲストを、もてなす場であった記憶が影響した可能性があるため、今後の研究とする。
- <sup>23</sup> 原文は 'We are told that it measured 160 feet.'である。
- <sup>24</sup> 大鐘の寸法については、TGと覚馬名所案内と全く違っているが、KGでは覚馬名所案内の数字に変更されているので、覚馬名所案内が後に参考とされたことは確実である。
- <sup>25</sup> ケンベルはその寸法を「鐘の厚さは一尺、高さが16尺(英訳本では高さ16尺8寸としている)、周囲は28尺8寸であった」としている。
- <sup>26</sup> 原文は 'This personage, who is held to be of an extremely sacred character and descended from the Sun-goddess, is named the Mikado resides at Kioto (or Miac) …'である。
- <sup>27</sup> その部分は「大変薄暗い謁見室と帝の寝室、特に扉がしまった状態では、寝室は全く暗闇の中である」である。
- <sup>28</sup> 原文は 'A resident of Kioto tells the compiler that stranger entering the above gate, should visit the buildings in the following order', である。
- <sup>29</sup> 内侍所、紫宸殿(儀式を執り行う所)、清涼殿、小御所、御学問所、御三間、御常御殿、建春、泉殿、聴雪、御馬場(競馬)であった。
- <sup>30</sup> 原文は 'As these are much more cheap than foreign ones, They are sent out from this city to others for a great value.'である。
- <sup>31</sup> 原文は 'Owing to the introduction of foreign goods, sold at considerably lower figures, the trade is now in a languishing condition.'である。
- <sup>32</sup> 女紅場とは、一般の華士族や一般庶民の女性が入学した「新英学校及び女紅場」であるが、「遊郭の女紅場も女子に必要な学問技芸を遊女に授けるため同時に設けられた(青山霞村、1976)」施設である。
- <sup>33</sup> 「京都最初の化学研究所」で、理化学の講義と同時に、シャボン、ラムネ、リモダーデその他の文明開化を象徴した西洋風の産業施設であった(青山、1976)。
- <sup>34</sup> 染殿、織殿は京都織物会社の前身で「府は西陣その他の織物業者を刺激奨励して、その事業を改良進歩させるため、平安朝にあった織殿染殿の模範工場を起こした(青山、1976)」
- <sup>35</sup> 原文は 'Kioto Bazaar'である。集産場は「京都のすべての名産品が陳列されて人々に縦覧(青山、1976)」された場所であった。
- <sup>36</sup> 遷都の後「京都の衰運を挽回し、もしくは防ぐには子弟に新知識を与えるのが何よりも急務(青山、1976)」とされて、明治2年5月には日本最初の小学校が京都に開設された。その年の12月までに市内に51の小学校(中学校13)が開かれた。
- <sup>37</sup> 覚馬名所案内の地図には、小学校を小さい黒の四角で表し、地図の右下に 'SMALL JAPANESE SCHOOL' と説明をつけている。
- <sup>38</sup> 稲荷<sup>28</sup>については、KGの名所には入っている。
- <sup>39</sup> すなわち、覚馬名所案内の初版に思われる版では、1日当たりの参拝者数が20人から30人、1877年頃の後期のものでは1日あたり100人から200人、と情報が更新された(千代問、2020)。
- <sup>40</sup> 当時の1円の価値については、色々な数字が挙がるが、例えば三菱UFJ信託銀行株式会社のホームページでは明治時代の1円は、「現在の価値に置き換えると2万円ほどであったと想定されます。当時の1銭が現在の200円の価値と同じ<sup>40</sup>」としている。そうすると金閣寺拝観料は500円である。矢野翔一監修(2019年12月18日)「[円]や銀行の誕生など!明治時代のお金にまつわる豆知識」三菱UFJ信託銀行株式会社 <https://magazine.tr.mufg.jp/90086#> 最終閲覧2021年2月5日。
- <sup>41</sup> 'The guide' (who expects a trifling fee) …が原文である。
- <sup>42</sup> 「義満が沐浴や歯磨きをした場所や、茶を点てるための取水口といった史跡を案内した。滝の上の平地になった所には、小沼に小さい島があり、昔々にはここに有名な白蛇が住んでいたといわれ、それを示す記念碑がある」と記述された。
- <sup>43</sup> 他にも「京都の工芸品は全国に名が通っていて(中略)旅行者は誰もが自分か他の人のために何かを買い込み、それを持って立去って行く」という記述がある。
- <sup>44</sup> KGには、ごく簡単な京都市内の地図がついている。
- <sup>45</sup> 筆者は2020年5月18日、実地調査で円山公園から將軍塚展望台まで上った。徒歩で40分の時間を要した。道は湿って草木が茂り石段の道は手入れがされず壊れかけた所もあったが、それは現在ほとんどの人びとが自動車道を使うためである。調査の結果、TGの述べたように、当時は將軍塚に徒歩で上ることは可能であったと思われる。

- <sup>46</sup> 原文は 'The evening of the 16th of Agust (sic.) every year, is particularly brilliant.' である。
- <sup>47</sup> 『京都大事典』の【大文字五山送り火】項には、「享保2年（1717）の「諸国年中行事」には市原の「い」、鳴滝の「一」が載る。さらに西山には「竹の先に鈴」、北嵯峨には「蛇」、観空寺には「長刀」があったという」（佐和他（編）、1984）とある。
- <sup>48</sup> 「1879（明治12）年にはコレラ流行のため、祇園祭は11月に実施された。86年、87年、95年にも同様にコレラ流行を理由に延期されている」（47NEWS 京都新聞社、2020年4月20日17:03）とある。
- <sup>49</sup> 原文は '...the Prince of Romania in 1920 and Prince of Wales in 1922...' である。Prince of Wales は後のエドワード8世である。
- <sup>50</sup> 東福寺 善慧院 (n. d.) 「東福寺 善慧院（明暗寺）について」<http://tofukuji-zennein.com/pg65.html> 閲覧日：2021年2月5日。
- <sup>51</sup> 訳者山口光朔は、訳者まえがきに、オールコック自身が「多少画才を有し（中略）写生ないし日本の木版画を模写した（中略）幕末期日本の風俗を知るためのきわめて貴重な史料」だとしている（山口光朔訳（1997）『大君の都（上）オールコック著』岩波書店、8-9ページ）。
- <sup>52</sup> キーリングが、祇園祭を実際に見学しないと書けなかったのか、という疑問については、キーリング以前に発行された西洋人文献の中の、祇園祭の記述の有無を確かめる必要がある。今後も調査を続ける。
- <sup>53</sup> ユネスコ東アジア文化研究センター（1975）『資料御雇外国人』によると、それ以前は、1878（明治11）年、千村五郎（同人社）によって、8月1日から12年1月30日まで、1877（明治10）年は三重県土族近藤真琴によって、7月1日から12月31日まで雇われた記録があるが、夏季休暇の有無についてど

ちらも記述がない。それ以前の記録では、8月を除いて、雇われた記録がある（明治8年は雇いの記録自体が無い）。

#### 参考文献

- ・青山霞村（1976）『改訂増補山本覚馬伝』住谷悦治（校閲）、京都ライトハウス。
- ・荒山正彦（1991）「明治期における英文日本旅行案内書の刊行—明治初期地理学史の一側面—」『大阪大学日本学報』第10号、123-138ページ。
- ・伊藤久子（2009）「研究余話：旅行ガイドブックの著者キーリング」『日本英学史東日本支部紀要』第8号、71-73ページ。
- ・大槻喬（1937）『京都博覧協会史略』京都博覧協会。
- ・川内有子（2020）「1860年代における西洋人の「忠臣蔵」へのまなざし：開国以前の日本人表象とフォークロア研究の興隆」『アート・リサーチ』立命館大学アート・リサーチセンター、第20号、11-20ページ。
- ・ケンペル、斎藤信（訳）（1979）『江戸参府旅行日記』平凡社。
- ・京都市（1975）『京都の歴史8』学芸書林。
- ・京都新聞（1996-2020）「祇園祭の山鉦巡行は中断と再開の歴史 応仁の乱で中止、本能寺の変で延期も」2020年4月20日17:03、<https://www.kyoto-np.co.jp/articles/-/226720>、閲覧日：2021年2月5日。
- ・京都府立総合資料館（1971）『京都府百年の年表I 政治・行政編』京都府。
- ・小嶋正亮（2019）「英文京都案内『CELEBRATED PLACES IN KIYOTO & THE SURROUNDING COUNTRIES FOR THE FOREIGN VISITORS』について」『宇治市歴史資料館年報平成29年度』1-33ページ。
- ・斎藤信（訳）（1981）『江戸参府紀行（ジーボルト著）』平凡社。
- ・佐和隆研・奈良本辰也・吉田光邦ほか（編）（1984）『京都大事典』淡交社。
- ・滝波章弘（2012）「IX 観光の文化装置 3. 旅行記」『よくわかる観光社会学』安村克己他（編著）ミネルヴァ書房。
- ・田中まり（2001）「『京都』における「日本文化」の発見—明治期外国人の京都観光と日本の伝統文化イメージの形成をめぐって—」『北陸学院短期大学紀要』第33号、245-258ページ。
- ・田中まり（2004）「19世紀末西欧における日本観光と日本イメージの形成—マレー社の『日本旅行案内』に紹介された京都—」『金沢星稜大学論集』第38巻第2号、33-40ページ。
- ・千代間泉（2020）「[資料翻訳] 山本覚馬著英文『京都とその近郊の名所案内』（1873）」『同志社女子大学大学院紀要』第20号、55-79ページ。
- ・千代間泉（2020）「日本初の英文京都ガイドブックの制作背景と改訂についての研究」『日本国際観光学会論文集』第27号、63-71ページ。
- ・千代間泉（2021年3月刊行予定）「[資料翻訳] W.E.L. Keeling 編纂『横浜、東京、、、京都へのツーリストガイド』（1880）の京都記述部分」同志社女子大学大学院紀要、第21号。
- ・ツンベルグ（1991）「日本紀行」『史料京都見聞記第二巻』駒敏郎、村井康彦、森谷尅久編集、法蔵館。定本『異国叢書』一、駿南社。
- ・東福寺 善慧院 (n. d.) 「東福寺 善慧院（明暗寺）について」<http://tofukuji-zennein.com/pg65.html> 閲覧日：2020年11月5日。
- ・長坂契那（2010）「明治初期における日本初の外国人向け旅行ガイドブック」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第69号、101-115ページ。
- ・中西直樹（2013）「明治前期・信州大谷派の海外進出とその背景—北海道開拓・欧州視察・アジア布教—」『龍谷大学論集』第481号、87-128ページ。
- ・長谷川雅世（2015）「明治時代の京都でのイギリス人旅行者の神社仏閣めぐ

- り — イギリス人の旅行記に描かれた京都の特別な寺々』『高知大学教育学部研究報告』第75号、191-202ページ。
- ・フロイス、柳谷武夫 (訳) (1966) 『日本史3 キリシタンのころ』平凡社。
  - ・保津川遊船企業組合 (n. d.) 「保津川下りとは 京都・亀岡保津川下り」  
<https://www.hozugawakudari.jp/about> 閲覧日: 2020年9月4日。
  - ・野口祐子 (2014) 「明治時代の英語ガイドブックにおける京都へのまなざし」『京都府立大学学術報告 (人文)』第66号、131-141ページ。
  - ・松田毅一、川崎桃太 (訳) (1978) 『日本史3 五畿内編 I』中央公論社。
  - ・妙法院門跡 (2006) 『国宝三十三間堂』三十三間堂本坊。
  - ・山口光朔訳 (1997) 『大君の都 (上) オールコック著』岩波書店。
  - ・ユネスコ東アジア文化研究センター (1975) 『資料御雇外国人』東京: 小学館。
  - ・早稲田大学図書館 (1996-) 『日本誌』  
<https://www.wul.waseda.ac.jp/collect/yo/ae3110.html> 閲覧日: 2020年10月5日。
  - ・Dennys, N.B. (Eds.). (1867). *The Treaty Ports of China and Japan. A complete guide to the open ports of those countries together with Peking, Yedo, Hongkong and Macao. Forming a guide book and vade mecum for travelers, merchants, and residents in general. With 29 maps and plans.* London: Trubner and Co., Paternoster Row. / Hongkong: A. Shortrede and Co. (The emergence of the world tour: a collection of early travel guides and handbooks / edited and introduced (in Japanese) by Hisako Ito; v. 2)
  - ・Keeling, W.E.L. (1880). *Tourists' Guide to Yokohama, Tokio, Hakone, Fujiyama, Kamakura, Yokoska, Kanozan, narita, Nikko, Kioto, Osaka, etc., etc.* Yokohama: Sargent & Farsari Co.
  - ・Farsari, A. (1890). *Keeling's Guide to Japan, Yokohama, Tokio, Hakone, Fujiyama, Kamakura, Yokoska, Kanozan, Narita, Nikko, Kioto, Osaka, Kobe &c., &c., Together with Useful Hints, History, Customs, Festivals Roads &c., &c., with Ten Maps*, Fourth Edition, Revised And Enlarged [Second Issue], Yokohama: Kelly & Walsh Limited.
  - ・Yamamoto, K. (1873). *Celebrated Places in Kiyoto and the Surrounding Countries for the Foreign Visitors*, Kyoto: Niwa.
  - ・Yamamoto, K. (1873). *The Guide to the Celebrated Places in Kiyoto and the Surrounding Places*, Kyoto: Niwa.

【本論文は所定の査読制度による審査を経たものである。】